

野洲川中流域の群集墳

—横穴式石室墳の分布と測量調査報告—

林 修平

1. はじめに

本稿で対象とする古墳群は、現在の湖南市針に所在する古墳時代後期の群集墳である。

古墳群は、野洲川に注ぐ針川の上流域の丘陵部から谷緩斜面に築かれている。狐栗古墳群（湖南市針）の南方に存在するが、同遺跡の範囲外にある。

調査対象とする古墳群は、『甲賀郡志』（滋賀県甲賀郡教育会編1926）⁽¹⁾や、『狐栗古墳群発掘調査報告書』（水野正好ほか1968）⁽²⁾などで部分的報告されていたが、その詳細は不明であったことから、古墳の詳細分布調査を実施し、本稿はその成果報告である。

詳細分布調査は、踏査による古墳の分布状況を確認し、古墳分布図を作成、その範囲を確定した。そのうえで遺構の残存状況とともに、墳丘と埋葬施設である横穴式石室の規模を一覧表にまとめた。また、完存する横穴式石室1基に対して測量調査を実施し、石室図面を掲載した。

2. 野洲川中流域の歴史的背景と古墳群

(1) 野洲川中流域の古墳

最初に本古墳群を理解する為に、野洲川中流域の歴史的な状況を簡単にまとめておく。

野洲川中流域は、滋賀県の東南部、現在の湖南市域にあたり、東に接する甲賀市とともに旧甲賀郡に属し、郡の東南端は伊賀・伊勢に接する。

古墳の築造は、5世紀初め、野洲川中流域の宮の森古墳（湖南市石部東）の築造を嚆矢とする。その後、首長墓は野洲川上流域の水口盆地に移動し、西籠子塚古墳（甲賀市水口町）、東籠子塚古墳（同）、泉塚越古墳（同）の3基の首長墓からなる泉古墳群を形成する。

この水口盆地での地域首長の隆盛の背景には、この地が近江から伊賀・伊勢へ抜ける交通路上の要地にあることがあり、植遺跡の大型倉庫建物群、大型方墳の泉塚越古墳、近江最古の須恵器窯の泉古窯など、5世紀代の重要な遺跡が相次いで見つかっている。

一方、野洲川中流域では、宮の森古墳の築造以降、南岸地域で茶臼山古墳群、二子山古墳、狐塚古墳などの10~20mの小規模な円墳が確認されており、いずれも採取された埴輪の特徴から5世紀末から6世紀中頃の築造と考えられる⁽³⁾。6世紀後半以降は、岩瀬谷古墳群や丸保古墳群などの横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が北岸地域を中心に造営が盛んとなり、7世紀初めには巨大な横穴式石室を持つ塚山古墳が築かれる。

以上のことから、野洲川中流域では、5世紀初頭の宮の

森古墳の築造後、小規模な円墳が地域ごとに築かれ、6世紀後半~末頃の群集墳の盛行を経て、7世紀初頭に再び首長墓が築かれる状況である。

(2) 針川流域のもう一つの群集墳、狐栗古墳群

野洲川中流域は、古墳時代後期の群集墳が比較的多く築かれた地であるが、今回調査対象とする古墳群の周辺は、群集墳の造営が活発ではない。特に中期古墳が築かれた若松・針・夏見・吉永地域では、今回の調査対象とする針川流域に存在する狐栗古墳群が唯一の事例である（図2）。

狐栗古墳群は、針川の東岸平坦地に築かれた21基からなる古墳群で、昭和42年（1967）に7基の古墳の発掘調査が実施された（水野正好ほか1968）。

報告書の調査成果による狐栗古墳群の概要をまとめると、
 ・古墳の築造時期は6世紀末~7世紀中頃
 ・古墳群は、7つの支群から構成され、平均3~4基からなる。このうちG支群が大規模な古墳を擁する盟主的な存在である
 ・埋葬施設は、6世紀末~7世紀前半は通有の横穴式石室、7世紀中頃に木棺を直葬する方形墳や小石室に変化するが、これは小支群を踏襲して連続的に築かれる。
 ・副葬品は、須恵器や土師器のほか、金環やガラス小玉などがあるが、武器や馬具などの副葬はみられない。

野洲川中流域では明確な終末期の古墳群は確認されておらず、このことからも地域的に特異な古墳群として注目されている。

3. 古墳の分布からみた墓域と支群構成

(1) 墓域の範囲

今回の調査対象の古墳群は、狐栗古墳群から南方に約300mさかのぼった針川の上流域にある。針川は標高639mの阿星山を源流とし、山腹の急斜面を流下し、やや川幅を広げて、緩斜面を形成しながら北流し、針集落を経たところで由良川と合流、平野部を経て野洲川に流入する。

古墳群は、針川が形成した谷筋を中心に、その東西の丘陵尾根から緩斜面にかけて分布しており、狐栗古墳群を含めた針川一帯が墓域であったと考えられる。確認できた古墳は53基、狐栗古墳群を含めると、総数74基となる。また、今回調査した古墳群の周囲は地形改変が著しく、本来は100基に迫る古墳が存在した可能性が高い。

想定される墓域の範囲は、古墳の分布から、北は、針集落南辺の谷頭、南は、谷が狭まり、山腹が急斜面となる現在の林道家棟線付近、東は、由良川の谷、西は、南から伸

びる丘陵尾根と考えられる。

（2）支群の構成

墓域内部は、古墳の分布状況から4つの支群に分かれるものと考えられ、これに狐栗古墳群が加わる。また、確認できた横穴式石室は、針川に向かって開口する事例が多いことから、針川沿いに墓道があったことが想定され、これを幹道として、各支群に分岐すると考えられる。

A～Dの支群の区分けは、古墳のまとまりを基本とし、それに立地している地形の変換点から導き出したが、結果的にそれぞれの支群は、古墳の規模や分布密度に違いがみられた（図3・4、表1）。

①A支群（A 1号～23号墳）

針川の東岸、崖上の平坦地に立地する、23基の古墳からなる。古墳が立地する平坦地は、南北約130m、東西約80m、針川に向かって北西方向に低くなる。古墳は近接して築かれ、墳丘裾を接するものが多く、いわゆる密集型の群集墳である。この密集型は、このA支群のほかには狐栗古墳群があり、両者は針川に面した平坦地に立地する条件や古墳の構成も非常に似ていることが注目される。

古墳の分布をみると、中央部やや東寄りに群中最大規模の1号墳があり、北に隣接して、やはり規模の大きい2号墳がある。両古墳の墳丘規模は、群中でも突出しており、盟主的な存在であることは疑いがない。その周辺には、直径約10m規模の3・5・7号墳があり、やや離れて同規模の13・14号墳がある。そして、約7～8mの小規模な古墳は、墓域東辺や古墳間を埋めるような形で築かれている。

現状では、支群東辺は林道が走り、針川沿いの西辺は大規模に地形が削平されていることから、より多くの古墳が存在した可能性がある。

②B支群（B 1号～20号墳）

針川の西岸、北東方向に伸びる尾根の東斜面に立地し、針川に面する南辺はすぐ崖面となる。20基の古墳から構成されるが、支群全域で地形の変更が著しく、墳丘が削られて石室が露出しているものが多い。特に支群北辺の丘陵尾根近くの緩斜面には、石室石材と考えられる花崗岩が散在しており、より多くの古墳が存在した可能性が高い。

古墳は、丘陵の等高線に沿うように、南西から北東方向に向かってB 1号～12号墳が列状に築かれており、その南の針川の崖に面してB 13号～18号墳が同じく列状に築かれている。B 19号・20号墳の2基は針川の対岸に位置する

このうち最大の墳丘はB 1号墳、直径10.6m。次いでB 9号墳が直径10.4m、その他は直径7～8m前後的小古墳が大半を占める。

墳丘封土が流出している古墳が多く、正確な規模を確定するのは困難であるが、露出する横穴式石室の大半も小規模なものである。

③C支群（C 1号～5号墳）

針川の西岸、針川に面した東側緩斜面と、北東方向に伸びる尾根稜線の小ピークに立地する5基の古墳で構成される。

東側緩斜面は、地形変更により広い平坦面が形成されており、埋没した古墳が想定されるが、現況ではC 1号・2号墳が確認できる。

C 1号墳は、直径11.6mの円墳、石室の大半は埋没するが、玄室壁面が天井付近で急激に内傾し、天井石が1石構成される特徴を有し、本古墳群で確認できた唯一の穹窿天井石室である。C 3号・4号は尾根小ピークに立地し、C 5号墳は、花崗岩の集まりを破壊された古墳とした。

④D支群（D 1号～5号墳）

針川東岸、北東方向に伸びる丘陵の山腹に立地する。針川に面したD 1号墳から東方向に展開し、D 1号からD 5号墳まで約20mの距離がある。墓域の広大さに対して古墳の数が少ないが、尾根ピークなど立地条件の良い適地があり、D 1号・4号墳の墳丘・石室ともに大規模である。

4. 横穴式石室

（1）横穴式石室の概要

本古墳群は、横穴式石室墳で構成される後期の群集墳である。そのなかには狐栗古墳群で確認されているような7世紀中頃の木棺直葬墳が含まれる可能性があったが、地表面上では直葬墳の事例は確認できなかった。しかし、古墳周辺部は地形変更が著しく、破壊された直葬墳の存在は否定できない。

横穴式石室は、全体的に保存状態はよくない。直径10m以上の大型墳で完存する事例は、A 2号・A 3号墳のみで、天井石などが外され、半壊する事例は、B 1号・B 9号、C 1号墳、D 1号・D 4号墳があり、A 1号墳は完存するが玄門部に土砂が堆積してその詳細は不明である。直径10m以下の小型墳ともなれば、墳丘が削られて石室が露出する事例が大半である。

確認できた横穴式石室のうち、両袖式の事例が9例、右片袖式が2例。石室の大部分は、いわゆる畿内系石室に分類されるもので、唯一、C 1号墳が穹窿天井石室である。

石室の石材は、古墳群周辺で産出される花崗岩が使われていると考えられ、同質の花崗岩の露頭が谷奥を中心にみられる。

（2）A 2号墳の測量成果（図5）

本調査では、保存状態が良好なA 2号墳の横穴式石室の測量調査を実施しており、以下、その詳細を記す。

A 2号墳は、A支群の中央やや東寄り、群中で最大の墳丘規模を有するA 1号墳に北に隣接する円墳。

東西直径17m、南北直径20m、墳丘高は北側で2.4m。

横穴式石室は両袖式、玄室縦断面が矩形となる畿内系の

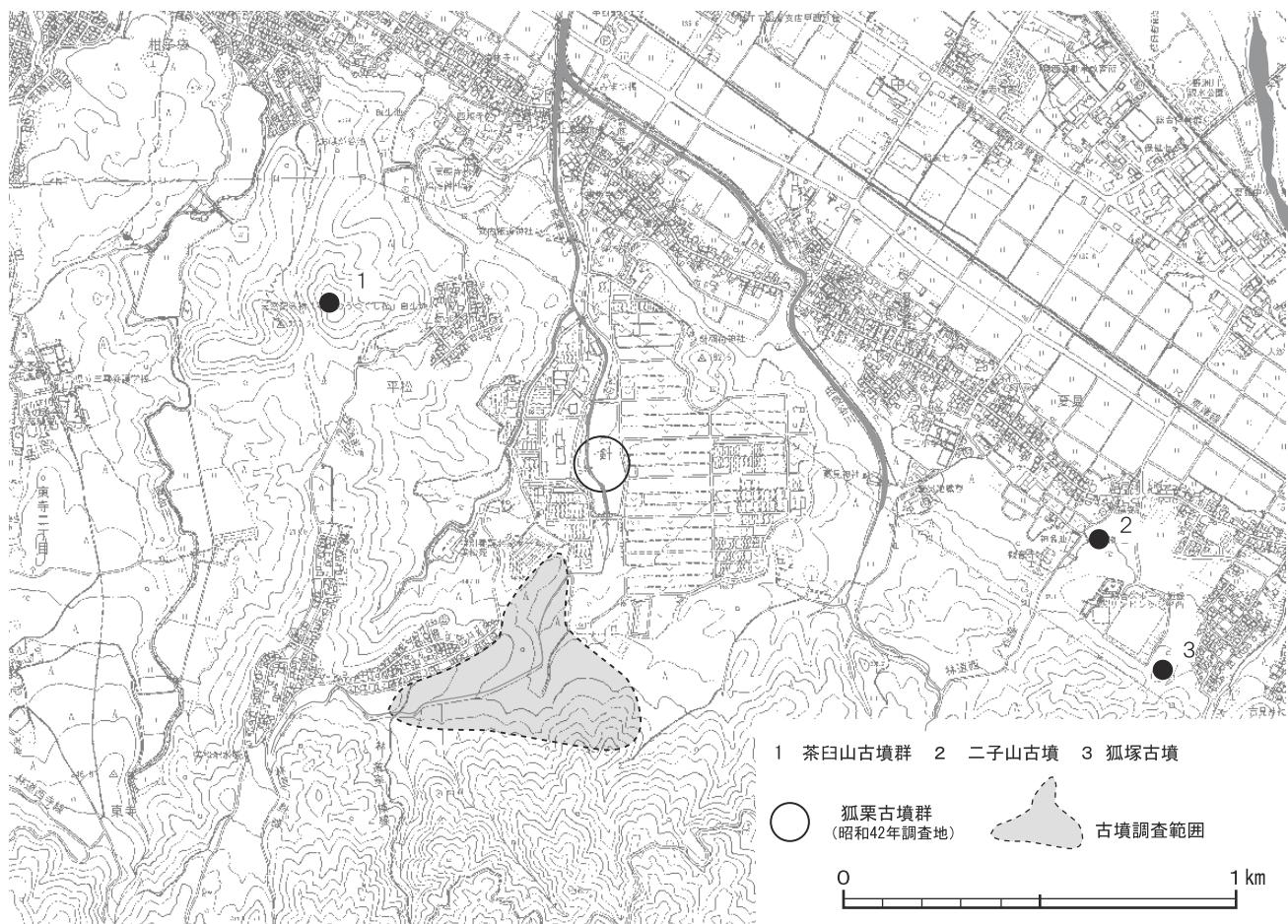


図1 調査対象地と周辺の古墳

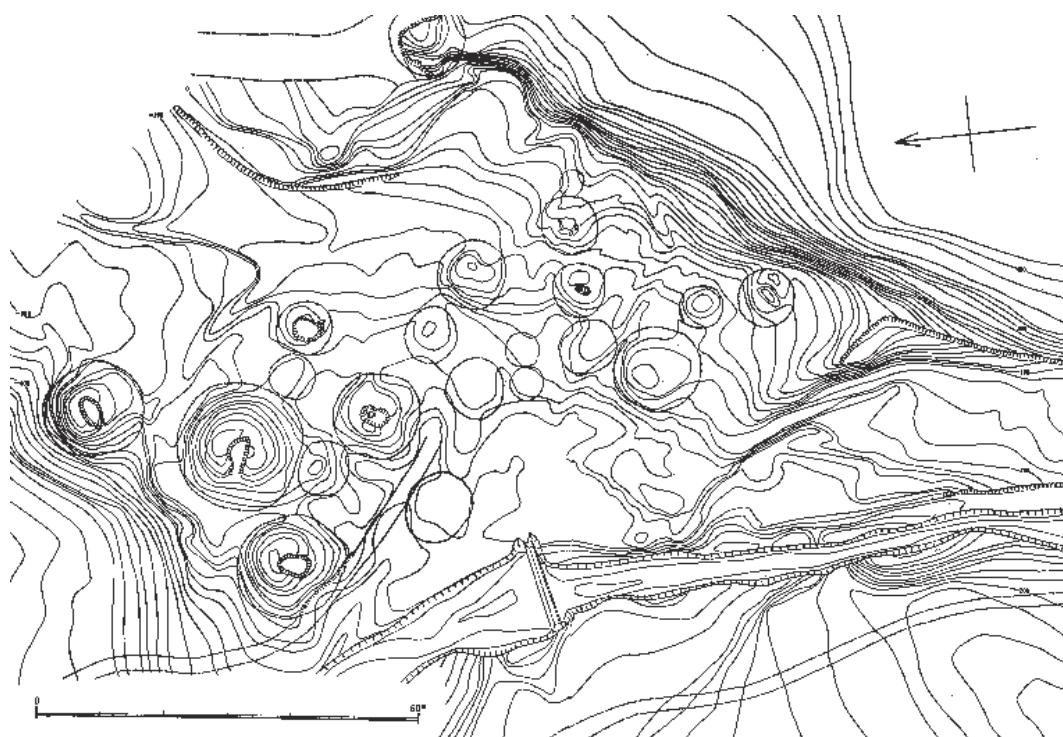


図2 昭和42年狐栗古墳群実測図

表1 古墳一覧

番号	墳形	直径	高さ	石室長	玄室幅	玄室長	羨道幅	羨道長	袖	現況
A1	円墳	22	2.6							石室完存
A2	円墳	18.5	2.4	10.93	2.02	3.93	1.03	7	両	石室完存
A3	円墳	12.1	2.3	8.92	1.81	3.82	0.92	5.1	両	石室完存
A4	円墳	7.9	1.2			1.3				石室半壊
A5	円墳	10.2	0.8							石室全壊
A6	円墳	7.7	0.4							墳丘上に石材あり
A7	円墳	11	1.5	5.6	1.4					石室半壊
A8	円墳	10.5	0.8							墳丘上に石材あり
A9	円墳	10.1	1.3							石室半壊
A10	円墳	7.8			1.2					墳丘上に石材あり
A11	円墳	9.6	1.2			1.2				石室半壊
A12	円墳	7.8	0.8							墳丘上に石材あり
A13	円墳	10.5	0.7							石室半壊
A14	円墳	13	1.6		1.98		0.98		両	石室半壊
A15	円墳	8.5	0.6							石材なし
A16	円墳	7.7	0.8							石室半壊
A17	円墳	6.4	0.4							石室半壊
A18	円墳	7								石室半壊
A19										陥没、石材散在
A20										陥没、石材散在
A21	円墳	8	0.8							墳丘上に石材あり
A22		7.8								石材なし
A23	円墳	11.6	1.6							墳丘上に石材あり
B1	円墳	10.6	1.45	7.25	2.03	3.55	0.98	3.7	両	石室半壊
B2	円墳	6.4								石室半壊
B3										奥壁・側壁一部露出
B4	円墳	6								墳丘土流出、石室露出
B5	円墳	6.5								墳丘土流出、石室露出
B6										石材散在
B7	円墳	8.2				0.8				石室半壊
B8										石室壁面一部露出
B9	円墳	10.4		7.45	1.55	3.05	1.05	4.4	右片	石室半壊
B10										石材散在
B11	円墳	7	0.2							石材散在
B12	円墳	7.6	0.4		1.4					石室半壊
B13	円墳	6	0.4							石室半壊
B14	円墳	6.8	0.8	4.7	1.43	2.3	0.9	2.4	右片	石室半壊
B15	円墳	6.6	0.25	4	1.13	1.8	0.6	2.2	両	石室半壊
B16	円墳	8.7	1.1		1.2		0.6	3	両	石室半壊
B17	円墳	8.8	1							墳丘上に石材あり
B18	円墳	6.7	1							奥壁・側壁一部露出
B19	円墳	7.8	1.2							側壁一部露出
B20	円墳	8.8	1.2							墳丘上に石材あり
C1	円墳	11.6	1.5	7.1	2.6	2.4	1.48	4.7	両	石室半壊
C2	円墳	6.5	1.2							石材なし
C3	円墳	11	2							墳丘上に石材あり
C4	円墳	12.4	1.8							石材なし
C5										花崗岩の集積、石室石材か
D1	円墳	15.2	1.5		2.23	3.9	1.2		両	石室半壊
D2										花崗岩露出、石室の一部か
D3										花崗岩散在、石室破壊か
D4	円墳	12.5	3.5		2.15	4.5	1.2		両	石室半壊
D5	円墳	8.4	1.4							石材なし

※墳丘の直径・横穴式石室の玄室幅は平均値を記した。袖は玄室奥から羨道方向を見た状況を示す。

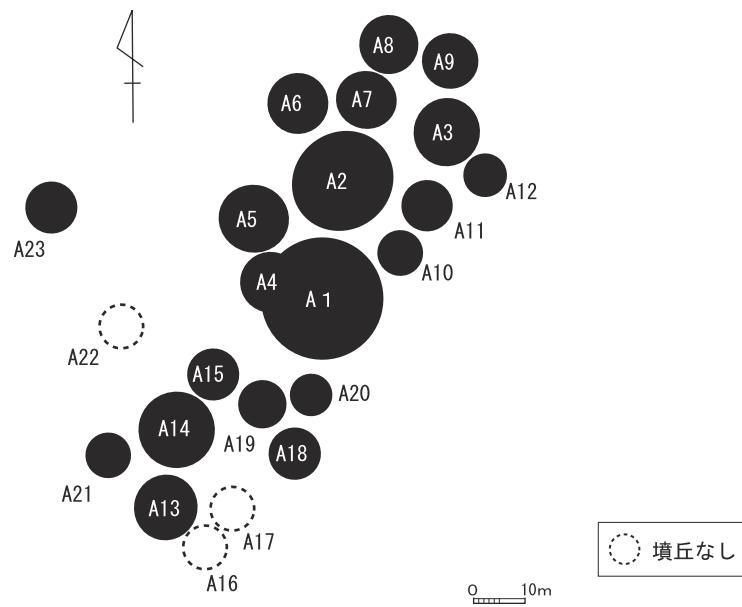


図3 A支群の古墳分布

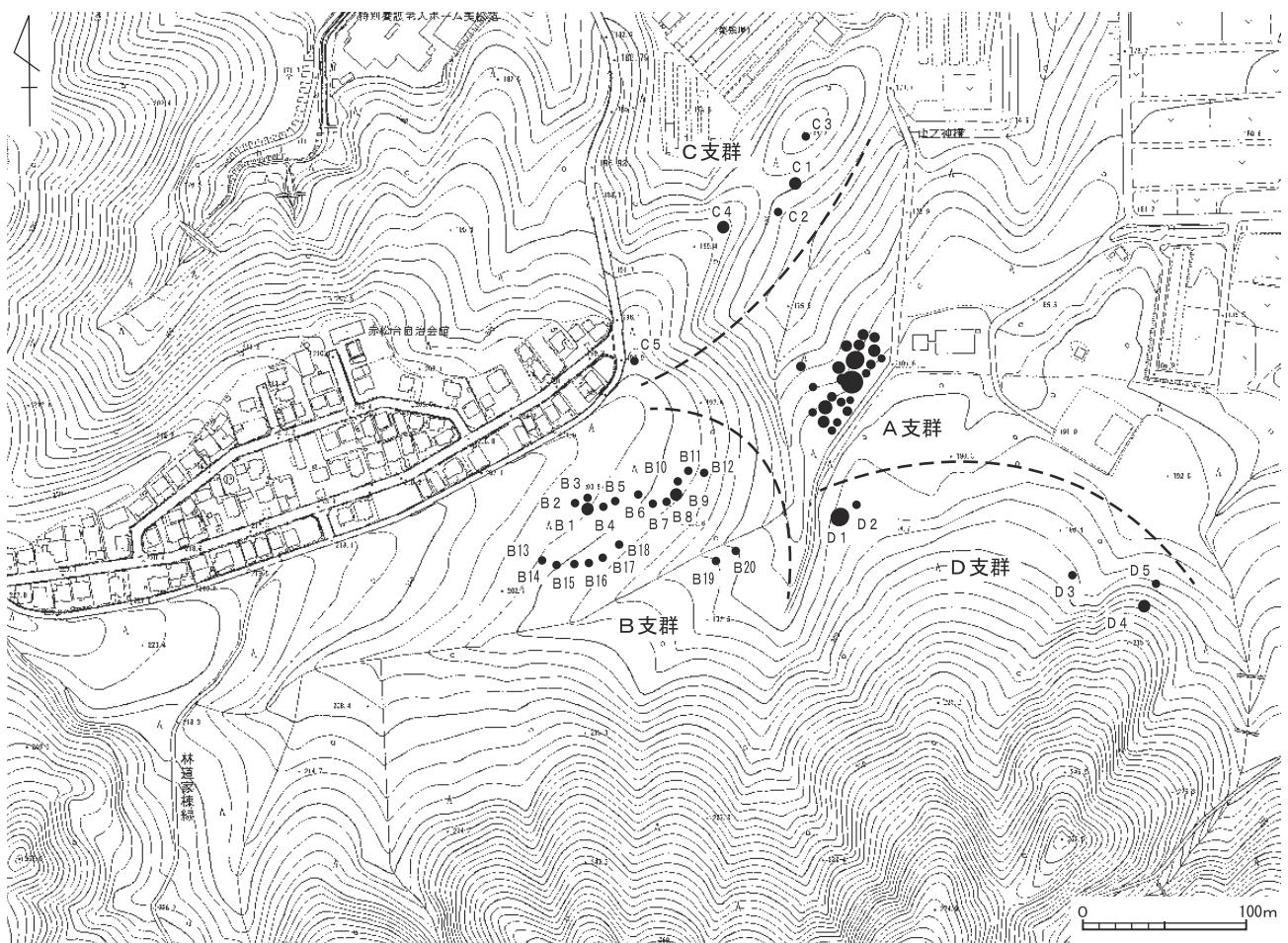


図4 古墳の分布と支群

石室。

玄室は完存するが、羨道は天井石3石分の範囲までは完存するが、それより開口部までは土砂が堆積し、石材が部分的に失われている。

【石室の規模】

全長10.93m、玄室は、幅は奥壁と玄門部で1.98m、中央で2.1m、長さは右側壁で3.95m、左側壁で3.93m、高さは奥壁側で現状2mである。羨道は、玄門部で幅1.03m、長さは7m、高さは玄門部で現状0.89mである。

【玄室】

玄室の平面は長方形、縦断面は矩形、横断面は現況床面から約1.1mの高さから急激に内傾する。床面の玄室幅が1.98mに対して天井部分では0.82mとなる。天井石は3石、水平に架構されるが、玄門部側1石目は前壁に向かって内傾する。

奥壁は、基底石に大型の方形石材2石に並べ、その上段から中型石材を3段積んでいる。側壁は4石構成、3~4段積み。横長の大型石材を主体に、その間を中型石材で埋めるように平行に積んでいる。

【玄門部】

両袖式で、右袖は、大型石材の1石構成、幅0.65m、奥行き0.64m、現状の高さ0.84m。一方、左袖は、大型石材の上部に横長石材を1石積んで高さを調整、幅は0.3m、奥行きは0.68m、現状の高さ0.7mである。

前壁は一石構成、高さは0.62m。幅0.88m、奥行き0.82mの石材。

【羨道】

天井石は3石残存し、羨門部側1石目が約0.48m高く架構されていることに特徴がある。側壁の大半は埋もれているため詳細は不明だが大型の石材は使われていないようである。

【開口部・墳丘前列石】

羨道天井石は現状で3石残存し、これより開口部側は羨道側壁の大半が埋没し、部分的に石材も失われているが、側壁石材自体は開口部まで伸びる。

また、地表面上では視認できないが、側壁石材につながる墳丘裾をピンポールで刺すと石材が列状に並んでいることが確認できた。

【構築工程】

玄室の構築工程は、大きく2工程に分けられる。1工程目は、玄室奥壁が基底石2石、側壁2段目までで、これが羨道の高さに一致する。2工程目は天井まで、この工程から玄室側壁が急激に内傾して積み上げられる。また、玄室側壁をみれば、奥壁側で大型石材が配されているのに対して、玄門側は小型石材で調整されていることから、玄室の構築は奥壁→側壁→袖石の順番で構築されていたことが復元できる。

【時期】

構築時期は、玄室石材の大型化が顕著であること、両袖式で、袖石が大型石材1石であることから、6世紀末頃と考えられる。

(3) その他の横穴式石室

ここからは大型の横穴式石室で、比較的構造が判明しているA3号墳、B1号墳、C1号墳、D1号墳、D5号墳の概要を記す。

① A3号墳

A2号墳の北東にあり、直径12.1m、高さ2.3mの円墳。両袖式の畿内系石室、石室全長8.92m。玄室は幅1.81m、長さ3.82mで、天井石は5石を水平に架構する。玄室奥壁は3~4石構成、7~8段積み。側壁は5石構成、4~5段積み。A2号墳と同じく玄室側壁が、現状の床面から0.9mの高さで急激に内傾する。右袖幅0.33m、左袖幅0.63m、袖石は2段積み、前壁1石、高さ0.55m。羨道幅0.92m、長さ5.1m、羨道側壁の石材は開口部まで伸び、墳丘前列石の存在が確認できる。

② B1号墳

B支群の南西端にあり、同支群では最大の規模の石室。直径10.6m、高さ1.45mの円墳。両袖式の畿内系石室、石室全長7.25m。玄室は幅2.08m、長さ3.55mで、天井石が外され、内部に土砂が堆積する。奥壁は不明、側壁は横1.0m、縦0.85mの大型石材が使われる。右袖幅0.33m、左袖幅0.63m、羨道幅0.98m、長さ3.7m、袖石は大型石材の1石、前壁は1石残存する。羨道側壁の石材は開口部まで伸びる。

③ C1号墳

尾根東側急斜面から針川沿いの平坦面との変換点に位置し、本古墳群で唯一の穹窿天井石室。直径11.6m、高さ1.5mの円墳。両袖式、石室全長7.1m、玄室の3分の2の高さまで土砂が堆積する。現状で玄室幅2.6m、長さは、右側壁で2.34m、左側壁で2.47m。奥壁は2石構成、最上段は1石となり急激に内傾する。側壁は2石構成、2段確認できる。天井石は1石。羨道幅1.48m、長さ4.7m、右袖幅0.65m、左袖幅0.45m、前壁の高さは1.0m。羨道は土砂に埋もれて詳細は不明。

④ D1号墳

D支群の最西端、針川に面した西斜面にあり、直径15.2m、高さ1.5mの円墳。両袖式の畿内系石室。墳丘東側は林道で破壊され、羨道の開口側が失われている。天井石2石が石室内に転落、石室の大半は土砂が堆積する。

玄室は、幅2.23m、長さは復元すると長3.9m程度となる。奥壁は現状で高さ約1.4m、3石構成、4段確認できる。右袖幅は0.4m、左袖幅は0.42m。羨道幅は1.2m、長さ1.7m残存する。

⑤ D5号墳

北に伸びる尾根先端小ピークにあり、本古墳群で最東端に

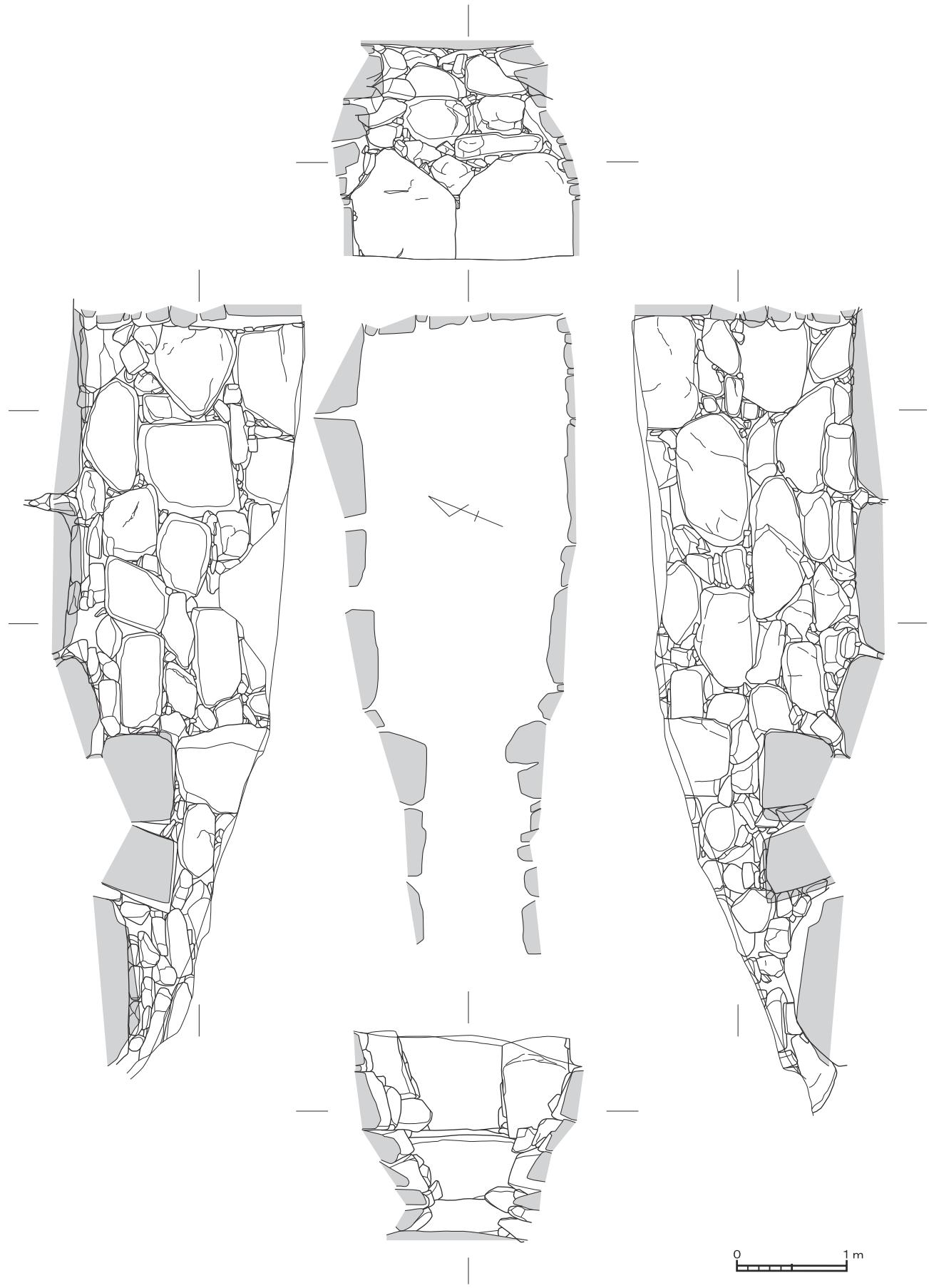


図5 A 2号墳横穴式石室実測図

位置し、これより丘陵が北側に張り出す。

直径12.5m、高さ3.5mの円墳。両袖式の畿内系石室。墳丘の東側と西側は封土が流出し、玄室奥壁部分、羨道開口部分が失われている。

玄室は、幅2.15m、長さは復元すると4.5m程度となる。右袖幅0.5m、左袖幅0.36m。羨道は3.2m残存し、幅1.20mで、羨道側壁に大型石材が使用されている。

(4) 本古墳群における横穴式石室の特徴

以上、完存するA2号墳と、大型で石室構造が判明する5基の横穴式石室を紹介した。このうち、畿内系石室5基、穹窿天井石室1基であったが、玄室の平面形態や石積みの状況から、その他の石室の大半も畿内系石室であった可能性が高く、穹窿天井石室であるB1号墳は古墳群中では特殊な石室に位置づけられる。

畿内系石室は、B1号墳をみれば、玄室奥壁基底石を大型石材の2石構成、玄室側壁は横長石材を平行に積み上げる特徴は、近江でみられる畿内系石室の特徴を有している。また、羨道天井石が開口部側で一段高くなる特徴は、近江でみられる羨道床面に段や傾斜のある石室の系譜であると考えられる（林2016）。

穹窿天井石室に関しては、石室の大半が埋もれているために詳細は不明だが、玄室平面が正方形に近く、天井石が一石で構成され、両袖式となる特徴は、大津北郊でみられる穹窿天井石室の特徴に類似する。

周辺部では、野洲川上流域の高山古墳群（甲賀市水口町）の4号墳の玄室平面が正方形であり、同1号墳も玄室幅が広い傾向がみられる（甲賀市教育委員会2008）。

現状で判明している横穴式石室の構築時期は、狐栗古墳群の発掘調査成果を参考にすると、大型の石室は6世紀末頃を中心とし、小型の石室の6世紀末～7世紀前半と考えられる。

5.まとめ

本稿は、これまで詳細が不明であった針川上流域の古墳群の詳細分布調査の報告である。

その成果をまとめると、古墳群は、針川の上流域の丘陵斜面から川沿いの平坦地にあり、踏査の結果53基の古墳が確認できた。

墓域は、針川が形成した谷筋一帯と考えられ、これに狐栗古墳群21基に、破壊された古墳を加えると、100基に迫る古墳が築かれたと考えられる。

墓域は4つの支群で構成され、大型古墳を中心に墓域が形成されるパターンや、等質な小古墳で構成されるパターンなど、支群によってその傾向が異なる。

古墳群は、横穴式石室墳で構成され、その大部分が畿内系石室と推測されるが、そのなかで穹窿天井石室を1基確認できた。

古墳の年代は、確認できた石室の構造から、6世紀末～7世紀前半と考えられ、狐栗古墳群では7世紀中頃の木棺を直葬する方形墳や小石室がある。

本古墳群は、複数の造墓集団が、針川上流域に墓域を求めた結果と考えられ、周辺部で同時期の群集墳が確認されない事実から、野洲川南岸の広い範囲から造墓活動が行われたと考えられる。

なお、本稿の執筆するにあたっては、辻川哲朗氏、宮村誠二氏からご教示をえたほか、古墳の測量にあたっては佐伯英樹氏のご協力をいたいた。記して厚くお礼申し上げます。

註

- 『甲賀郡志』は、「針古墳群」の節で、字山ノ神に5基、字狐栗に2基（元は5基）、字針畑に1基の古墳があること、その他に破壊された古墳が4、5基あったこと、大小の祝部土器が採取されているが副葬品はないことを記す。
- 『滋賀県甲西町狐栗古墳群発掘調査報告書』は、小字狐栗、山ノ神、八田ヶ谷に古墳群があり、それぞれ狐栗古墳群、山ノ神古墳群、八田ヶ谷古墳群の名称を付している。このうち山ノ神古墳群が本稿で対象とする古墳群のうちのA支群に該当すると考えられ、そこには36基の古墳があったことを記す。A支群で確認できた古墳は23基、古墳が立地する針川東岸の平坦地は、地形改変が著しく、半壊する古墳も多いことから、これが本来の古墳数を反映している可能性がある。
- 茶臼山古墳群、二子山古墳からは円筒埴輪片を表面採取しており、狐塚古墳群からは人物埴輪の採集記録が『甲賀郡志』に載る。埴輪の年代は宮村誠二氏のご教示による。

挿図・表典拠

図1・4 湖南省都市計画図に加筆。

図2 水野正好ほか（1968）に拠る。

図3・5、表1 筆者作成。

文献（著者名・機関名50音順、刊行年順）

滋賀県甲賀郡教育会編（1926）『甲賀郡志』

水野正好ほか（1968）「甲賀郡甲西町狐栗古墳群発掘調査報告書」

（滋賀県文化財調査概要 第6集） 滋賀県教育委員会

林修平（2016）「近江の横穴式石室にみる羨道の変遷」『淡海文化財文化論叢』第8輯 淡海文化財文化論叢刊行会

甲賀市教育委員会（2008）「甲賀の横穴式石室」『甲賀市史編纂叢書』

第4集

（はやし しゅうへい：調査課 技師）

平成31年（2019）3月31日

紀要 第32号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(TEL)077-548-9780／(FAX)077-543-1525

e-mail : mail@shiga-bunkazai.jp

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：(株) 印刷 同朋舎